

# 聖書の正体『燐・han』V

## 「死海文書・義の教師」の全貌

2013・12・26

### 「義の教師」は秘密の教えを解き明かした人

1. イギリスの福音主義・新約学者フレドリック・F・ブルースの小論文「ダニエル書とクムラン宗団」は斯くいう。

「ダニエル書の思想は新約にもまたクムラン宗団にもその影響を及ぼしており、ダニエル書とクムラン宗団とは同じ思想的傾向を持っていることを指摘している。紀元 70 年のエルサレム滅亡に至った戦争においても、反ローマのユダヤ人は、メシア時代の到来を説くダニエル書の教えによって行動したと思われる。またダニエル書の「大いに愛せられる人」は、クムラン文書の「(共同体の)ユニークな教師」と関係があると見られている。クムラン文書の中には、ダニエル書の断片も発見されており、直接ダニエル書には関係がないが、「ナボニドスの祈り」と言われる文書には、この王の 7 年にわたる(精神)病を医したユダヤ人の悪霊退散者(ガーズグリーン、複数——exorcists)に言及されている(ダニ 4・25,32 以下)。この他にも第四洞穴から出た三種類のアラム語文書の断片があり、第四洞穴よりの「選集」(florilegium)の中には「予言者ダニエルの書にしるされている」の一句もあり、ダニエル書との関連も見られているので、ダニエルについての伝承は広く伝えられたものと思われる。ダニエル書には「秘密の事」(ラズ)とその「解き明かし」(ペシャー)が述べられているが、これらの語はクムラン文書にも見出され、神の使信はこの二つに分けられているので、この二つが結合されなければ、その真意がわからないのである。この二つを結合した者はクムランでは「義の教師」であり、原始キリスト教においてはイエス・キリストである。ダニエルの時代では、このような秘密を理解した者は「賢い者」であり、彼らは大空の輝きのように輝くのである。クムラン宗団の人々は、この「賢い者」の後継者であると見ることができる。「少しの助け」と言われたハスモン家の力は増大したが、期待したメシア時代は到来せず、そのためクムランの人々は、ダニエル書のように、1 年を 7 年に数える週年説をとるようになったと見られる理由もある。いずれにせよ、ダニエル書やその他の旧約の文書がどのようにクムラン文書で解釈されているかということを知ることが新約聖書の理解にとって重要なことである。」と。

### 「義の教師」は邪悪な祭司に「のみ込まれた」(殺された)人

2. 前記一文中の「ダニエル書には「秘密の事」(ラズ)とその「解き明かし」(ペシャー)が述べられているが、これらの語はクムラン文書にも見出され、神の使信はこの二つに分けられているので、この二つが結合されなければ、その真意がわからないのである。この二つを結合した者はクムランでは「義の教師」であり、原始キリスト教においてはイエス・キリストである」は、「死海文書と義の教師」(ベティ・ストックバウナ 著、石川道子 編)の次の一文に符合する。

「「ペシャー」という名称の下に分類される文書は、義の教師の生涯の出来事について多く言及しているのが最も精密に調べられてきた。ペシャーとは、聖書の文章の改訂を表す言葉である。この文書の作者は、普通は予言的な作品である聖書

という本を調べ、作者自身が生きた時代の出来事に照らして聖書の再解釈を試みている。イザヤ、ハバクク、ナホムという予言者は論理的な選択だった。なぜなら、彼らの書は、ユダヤの指導者たちに対して、神の道に戻り、メシアの時代に備えようと警告するものだったからである。

国内にはその他の勢力がある——「順調な物事を求める者たち」、すなわち楽な解釈を探している者たちである。「……彼らは不正な教えと嘘をつく舌と不誠実な言葉とをもって多くの者を迷わす。王や王子や祭司や民衆は、改宗者もろとも彼らに引きつけられる。都市や部族は彼の忠告に従って滅びるだろう。貴族や指〔導者〕は彼らの舌の残〔忍さによって〕衰退するだろう。その時代に大量の死体が出るだろう。負傷者は数知れず、彼らはその間違った忠告のせいで、それらの身体に躓いてよろけさえするだろう」。(PN-II)

この教師自身の共同体のメンバーに「嘲笑する人」すなわち「欺きの男」がいる。「ハバクク書」第一章十三節に「ああ、裏切り者よ、邪悪なものが正しい人間をのみ込むとき、何ゆえに見過ごし沈黙するのか」とあった。ペシャールによる解釈はこうであった。「このことに関する説明は、義の教師が折檻されるときに沈黙し、評議員全員の真っ只中で律法を侮辱した欺きの者を前にして、この教師にまったく援助の手を差し延べなかったアブサロム家と評〔議会〕のメンバーとに関係している」(PN-V)。「アブサロム家」とは「裏切り者」全体を言っているのかもしれない。アブサロムはダビデ王に反逆し裏切ったダビデ王の息子だからである。

「邪悪な祭司」がいる。「……彼はやって来た当初は真理の名によって呼ばれた。しかし、彼がイスラエルを支配した時、彼の心は躍り、彼は神を捨て規範を踏みこじった。富の故にである……彼はあらゆる種類の汚い〔冒瀆〕に身を置き、忌むべき道に従った」。(PN-VIII)

次の文中の「のみ込む」という句は、普通ヘブライ語で、捨てること、あるいは殺すことを意味している、この文章が暗に示すことは、邪悪な祭司が罪の贖いの日に教師を捕らえ、ついには教師が殺されるのを見届けるということである。それにはこう書かれている。「……邪悪な祭司は義の教師を迫害し、追放の地で激しい怒りに燃えて彼をのみ込んだ(殺した)。しかし、贖いの日の祝宴の時、彼は人々の前に現れて彼らを殺し、彼らが断食の日、すなわち安息日につまずく原因となった」。(PN-11)

別の句にはこう書かれている。「……〔祭司、すなわち義の教師に手をかけ〕た邪悪な祭司は彼を死に追い込んだ……そして、神は、彼が流した〔血のゆえに罰することが〕ないまま邪悪な祭司を許したりはしないだろう。〔神は〕、彼を処刑〔復讐〕するために諸国の中で最も乱暴な者の手へと送り出し、〔む〕くいを受けさせるだろう」。(PP-37-IV)

キティムは、この教師と貧しい人々の共同体を迫害した者たちに復讐する勢力として描かれている。ペシャール・ハバククにこう書かれている。「……最後のエルサレムの祭司たちは富を築き、諸民族から略奪することによって得る。しかし時代の終わりに、彼らの富は略奪の成果もろともキティムの軍隊の手に渡るだろう……」。(PH-IX)

## ペシャール・ハバククより

ハバクク書第二章一一二節「そして、神は最後の世代に何が起ころうとしている

かを記しておくようにとハバククに言われたが、時代の終わりを彼に知らせなかった……そして、神が言い給うたことは、『それを読むものが走るように……』。それを解釈すると、それは義の教師に関係し、神は彼に、自分の下僕、つまり予言者たちの言葉の謎をすべて明らかにされた。」

### 「義の教師」の文献学的輪郭

3. 私(新村)は、日本語で出版されている数多の「死海文書」について、なるべく「トンデモ本」(異端の書)を読むようにしている。なぜなら正統派と言われるバチカン系に迎合した著物には真実や真理が見えにくいからである。現在、私(新村)の傍らには次の七冊の著書がある。①「死海文書の謎」(P・デイビス 著 浜洋 訳 大陸書房 1978 年刊)、②「死海文書の謎」(M・ベイジェント、R・リー 共著 高尾利数 訳 柏書房 1992 年刊)、③「イエスのミステリー—死海文書で謎を解く」(B・スーリング 著 高尾利数 訳 NHK 出版 1993 年刊)、④「死海文書と義の教師」(ベティ・ストックバウナ 著、石川道子 編 シェア・ジャパン出版 1996 年刊)、⑤『封印された「死海文書」の秘密』(K・V プフェッテンバッハ 著 並木伸一郎 訳編 KK ロングセラーズ 1997 年刊)、⑥『知っておきたい「死海文書」封印された真実』(K・V プフェッテンバッハ 著 並木伸一郎 訳編 竹書房 2012 年刊)、⑦「解釈 死海文書」(世界古文書研究会 著 青谷舎 1997 年刊)、その他ネット上に展開されている「論文・逸文・異聞等」を吟味・検証し、ほぼ 100% 確信を得たものを論攷している。

### 「義の教師」の解明宣言

4. この度、未だ解明されていない「死海文書・義の教師」と「イエス・キリスト」の実像を検証著物及び検証小論文と共に、本日ここに、私(新村)の不滅の梵我と名誉にかけて、以下の通り解明すると同時に公表する次第である。

### 「義の教師」の片鱗 1

5. まず、上記 3 の⑥『知っておきたい「死海文書」封印された真実』(K・V プフェッテンバッハ 著 並木伸一郎 訳編 竹書房 2012 年刊)の次の一文である。

#### 「第一章 封印された『死海文書』の秘密 『死海文書』解説にまつわる不可解な謎

1947 年、アラビア半島北西部に位置する死海のほとりにあるクムランの洞窟から『死海文書』が発見されてから、すでに半世紀以上のときが経とうとしている。

しかし、その解説作業は遅々として進んでいない。

当初、1960 年までに解説作業を完了すると目されていたが、予定は大幅に遅れ、今日に至っても全体の半分ほどしか、その成果が発表されていないのだ。

『死海文書』の発見の経緯はセンセーショナルなものであった。しかし、その衝撃とは相反して、文書そのものが人々の関心を引くことはなかった。

それは、なぜか？

そもそも偽典ではないかとの噂が立ったため、軽く見られたことも影響しているかもしれないが、一部の専門家以外、関心を示す識者が少なかったことも一因であろう。

だが、1950 年、事態は一変する。それまでに公開されていた『死海文書』の資料をもとに、フランス・ソルボンヌ大学の教授アンドレ・デュボン・ソメールが、「義の教師」と呼ばれる「イエスの原型」ともとれる人物が文書に登場してくることを発表したのだ。それ以来、『死海文書』は専門家はもちろんのこと、一般人の関心

をひきつけることとなり、同時に文書はスキャンダルの渦中に投げ込まれることになった。

「イエスにモデルがいた」と唱えるソメールの説は、かなり興味深い。

しかし、キリスト教を信じる者たちにとって、驚天動地の出来事だった。それは"父"として崇拝してきた神聖なる人物に、生身のモデルが存在していたことを意味するからだ。

今まで信仰してきたイエス・キリストとは、一体いかなる者だったのだろうか？キリスト教徒たちの間に動揺が走った。

この状況をバチカンが見過ごしておくはずもない。聖書の研究と解釈を長きに渡り独占してきたバチカンにとって、彼の説はその牙城を揺るがす危険性を有していたからだ。

事実、ソメールは『死海文書』の調査機関である「国際チーム」の責任者を務めるP・ロラン・ド・ヴォー神父を介して、バチカンからの圧力を受けることになる。

しかし、バチカンの圧力をもものともせず、ソメールの説を支持する者が現れた。その者は同じ「国際チーム」のひとり、ジョン・マルコ・アレグロである。

アレグロは、「国際チーム」の学者たちの中でも、もっともダイナミックで、独創的で、しかも聡明な学者であったという。その彼がソメールの説を支持したのには、理由がある。彼は自身が所属する「国際チーム」に、不満を持っていたのだ。

なぜなら、資料をチームの一部の人間だけが独占していたからである。集められた資料は、たしかにチームを構成する研究者たちに公開されてはいた。だが、洞窟から発見される資料を最初に点検するのは、常にチームの長であるド・ヴォーとその腹心のミリク神父であった。そして、これらの資料を誰に割り振るかも、彼らだけで決定しているのだ。

1923年、イギリスで生まれたアレグロは、マンチェスター大学で論理学、ギリシア語、ヘブライ語を学んだのち、セム語コースに移り、聖書を言語学の分野から研究しはじめた。その後、オックスフォード大学の博士課程に移って一年、主任教授の勧めで「国際チーム」の一員となったのである。

アレグロは、いかなる宗教的偏見にも制約されず、物事を見たまに判断できる、そして、ときとして激しい口調で持論を展開する、独創的だが、やや激しい気性の人物であった。まだ若く、野心的でもあった彼にとって、資料が語る真実を握りつぶそうとする「国際チーム」内の保守派の動きは、我慢ならないものだった。

アレグロは、1956年の1月、イギリス北部のラジオ局から放送された『死海写本(文書)』に関する番組で、ソメールの論を支持すべく、短い講話を行った。

「私は、写本の断片の研究を進めていくうちに、デュポン・ソメールが論文で述べたことは、彼が思っている以上に正しいと確信するようになった。

つまり、こういうことだ。

イエス・キリスト誕生の100年以上も前に存在していた、極端なユダヤ教のあるセクトが残した文書の中に、キリスト教の儀礼や教義の起源が見出せるのだ。いや、それ以上とっていいかもしれない。なぜなら、イエスのモデルが存在しているからである」

『ニューヨーク・タイムズ』誌が、アレグロが行った放送に素早く反応した。

「ジョン・マルコ・アレグロは、昨夜の放送で『主の晩餐』や『新約聖書』のイエ

スとその教えの、少なくとも一部が、死海のほとりの"クムラン宗団"という不可思議な共同体をつくって暮らしていた宗団から生まれたものであると述べた」と書きたてたのだ。

タイムズの記事を見た「国際チーム」の長ドゥ・ヴォーは憤然と反論した。

「アレグロが手に入れられるすべての資料は、チームのメンバーすべてが手にすることのできるものだ。それを見るかぎり、ソメールの解釈を支持する箇所など、まったくくない！」

「国際チーム」は、1954年に第四洞窟から約800の巻物が発見されたのを受け、その膨大な資料を調査研究するためにヨルダン政府古物管理局の依頼により設立された機関である。表向きは国際的な学者を集めた委員会の体裁をとっているが、メンバーの選定に不可思議な側面が多々ある。考古学、古書学など、それぞれの分野で第一人者がいるにも関わらず、そうした"適任者"がひとりとして選ばれていないのである。

「国際チーム」は、責任者を務めるフランス人のロラン・ドゥ・ヴォー神父(エルサレム聖書学院院長)を中心に、腹心のポーランド人のジョーゼフ・ミリク神父、アメリカ人のフランク・クロス教授(マコーミック神学校)、同じくアメリカ人のスキーハン(アメリカ・カトリック大学)、フランス人のジャン・スタルキー神父(アラム語専門家)、同じくフランス出身のバルテミー神父、ドイツ人のクラウス・フンノ・フンツィンガー博士、イギリス人のストウラグネル(オックスフォード大学院生)、そしてジョン・マルコ・アレグロの8人が付き従っていた。各メンバーには、一定の資料が割り振られ、研究・解釈・翻訳が任された。

表向きの目的は、『死海文書』の公刊である。しかし、その真の目的は、別のところにあった。

(アレグロ以外の)メンバーからの信頼を得ており、ミリク神父を腹心にチームを牛耳っていたドゥ・ヴォー神父の背後に、カトリックの総本山バチカンが控えていたのだ。

バチカンは、聖書研究の総本山であり、"聖書研究の独占"をその使命としている。なぜなら、聖書の解釈を独占することで、教皇を頂点とするカトリック組織は、安泰に維持されるからである。それをより強固なものとするために、バチカンはドゥ・ヴォー神父を介して『死海文書』の研究にも影響力を行使しようと画策していたのである。

## "今世紀最大の発見"がキリスト教に与えた致命的打撃

発見以来、続々と発見される文書の断片は、「国際チーム」のもとに持ち込まれ、それは高い金額で買いあげられた。ヨルダン政府公認の国際的組織とはいえ、小さな研究チームが高額で買い続けられたのはなぜか？ その背景に世界一の金持ち、バチカンが控えていたからではないだろうか？

そうした憶測の象徴となるのが、1991年に刊行された『死海文書の欺瞞(ぎまん)』(M・ペイジェント、R・リー共著)である。

本書のふたりの著書は、遅々として進まぬ文書研究の遅延と、「国際チーム」が保管している文書のほとんどが公開されていないことに言及。それらの元凶となるのが、バチカンの陰謀であると断罪している。

「なぜ彼らは公開をしぶるのか？ それを公開することが、カトリック一派にと

って不都合な結果を招くことになるからだ」

と、まるでバチカンの陰謀を告発するかのよう、明確に記述しているのだ。

『死海文書』の内容如何によっては、これまで『新約聖書』の福音書や『使徒言行録』などで、部分的にしか語られることのなかったイエスの姿に新たな光が当てられる可能性が大いにある。場合によっては、キリスト教に致命的ともいえる衝撃を与えるかもしれない。

バチカンがそうしたスキャンダルだけは、避けたかったのではないか？

『死海文書』が「今世紀最大の考古学的発見」といわれる本当の理由はここにある。

はたして、バチカンがそこまで恐れる『死海文書』は如何なる文書なのか？

その真実の姿を知るためにも、次項ではその発見の経緯からみていくことにしよう。

歴史的発見に話を移す前に、その発見にまつわる不可思議な逸話をここで紹介しておきたい。

ルネサンス期の占星術師ノストラダムスが残した預言の書に、『死海文書』の発見を予言したと思われる記述があるのだ。『百詩篇集(一般には『諸世紀』として知られている)』の第一巻、第二五番に、次のような預言詩がある。

失われ、長い間隠され、再び見出される

ひとりの羊飼いは、半ば神のように尊敬される

かくして月は、かの長い時代を終える

他の風説は、不名誉を得るだろう

まず一行目と二行目だが、「失われ、長い間隠され」ていたものが、「ひとりの羊飼いは」の手によって、「再び見出され」たのは、まさしく『死海文書』の発見の経緯を預言している。

また四行目は、『死海文書』によって、これまでの聖書学や預言解釈における風説(学説)が覆されることを意味しているのであろう。

難解なのは、三行目の「月は、かの長い時代を終える」の解釈だ。ノストラダムスの預言詩における「月」はイスラム教の象徴であることは研究家が一致して唱えるところだ。ということは、素直に読めば、「イスラム教の時代の終わり」を意味していることになる。

パレスチナに長く続いたイスラム教の時代が終わり、イスラエルがかの地で建国を宣言したのが1948年。まさに『死海文書』が発見された翌年のことである。

16世紀最大の預言書は、『死海文書』発見までも見通していたのだろうか？

## 「第二章 古代ユダヤの秘儀宗団「クムラン」の謎

### 選ばれし者が集う秘教宗団「クムラン」

クムランは、聖なる都エルサレムから直線距離ではわずか30キロのところ、位置する。

だが、死海のほとりにたどり着くには、急峻(きゅうしゅん)な峠と深い溪谷を避けて迂回して行かなければならない。地図の上を直線で結ぶように、まっすぐ進むというわけにはいかないのである。クムランの地を訪ねるには、まずオアシスの町エリコに向かって下り、その途中からはエリコを迂回するようにして死海のほとりを目指すのだ。

エルサレムとクムランの標高差は、約1000メートル。標高700メートルの高

原にあるエルサレムから、海面下 300 メートルのクムランに一気に下らなければならぬ。これだけの高低差があると、気候の変化も明確である。エルサレムでは凍えるような氷雨(ひさめ)が降っていたのに、死海のほとりでは強い日差しに悩まされるといふ、寒暖差を体感せねばならぬ。

クムランは乾燥した気候であるが、『死海文書』が風化することなく、2000 年の歳月を経て、われわれの目の前に姿を現してくれたのも、こうした風土のおかげであろう。

だが、死海が魚も住めない塩の湖であるように、湖畔の台地に建つキルベルト・クムランもまた、本来、人が住むような場所ではなかった。クムラン宗団が、生活の基盤としたのは、このように過酷な土地だったのである。

『死海文書』が発見された洞窟から、ほんのわずかの距離のところにあるキルベルト・クムランは、塔を中心に泥炭岩の丘に向かって広がっている。貯水槽が中核なる、縦横に水路を配された、計画性をもって建造されたものだ。そこからは、遺跡に住んだ者たちの建設技術レベルの高さと同時に、新鮮な水を得るためにどれほど苦心したのかも、うかがい知ることができる。

もっとも、クムラン宗団の人々にとって、水は単なる飲みものではなかった。階段状に下る貯水槽の水は、彼らにとって大切な沐浴(もくよく)のためのものでもあったのだ。沐浴=浄めは、彼らにとって、宗団の規約に明記された重要な儀式だったのである。

しかし、なぜ彼らは人里を離れ、過酷ともいえる土地に生活の基盤を置いたのであろうか？ はたして、クムラン宗団とはいかなる集団だったのであろうか？

これまでに判明している事実を踏まえ、彼らの正体を探ってみることにしよう。

クムランの遺跡であるキルベルト・クムランに住んだ謎の集団=クムラン宗団については、彼らが原始共産主義的共同体を維持していたこと、厳格な戒律と規則を持っていたこと、浄めの儀式、食事に関する規則、善と悪についての教えなど、さまざまな宗団規律を守っていたこと、そして自らを「選ばれた者」と規定する強烈な選民思想を有していたことなどが、今日までの研究で明らかになっている。

なかでも「選ばれた者」という考え方は、この宗団の最大の特徴といえる。彼らは、自らを神から霊的啓示を受けた者と規定し、神が生んだ光と闇の霊のただ中に投げ出されてはいるものの、やがて光は闇を克服し、勝利をおさめ、神の救済がなされると信じていたのである。

原始共産主義的な規則や女人禁制、異常なまでの"終末"への関心といった点から鑑みて、謎の宗団クムランの実体は、ユダヤ教の一分派=エッセネ派の中核組織ではなかったかという説が、今や定着しつつある。

そこで、まず、エッセネ派とはいかなる宗派であったのかを探ってみよう。そうすれば、エッセネ派の中核的組織であったクムラン宗団がいはゆるものかであったのか、確実にわかるはずである。

### 白い服の兄弟たち=エッセネ派

エッセネ派についてそのルーツを探っていくと、エジプトにたどりつく。

新王国時代に宗教改革を行ったアクナトン王の治世の直前(紀元前 1370 年頃)の時代、あるひとりの長のもと、いくつかの職能団体が集まって大きな「秘密」組織が形成されていた。この集団の教義にはゾロアスター教的要素が入り込んでい

るのだが、それはアクナトン王の支持があったからかもしれない。

いずれにせよ、集団を分けるものは、言語や宗教的基盤、あるいは職業であった。その中であって、エッセネ派は医者や治療師を核とし、エジプトのアレクサンドリアを中心に形成された組織内の一分子であった。その人道主義的活動が人々に好意的に迎えられるのか、大きな「秘密」組織のひとつに過ぎなかったエッセネ派は勢力を拡大していく。その活動範囲はエジプト周辺にまで広げたのち、最終的に活動拠点はふたつに絞られる。

そのうちのひとつはパレスチナ、もうひとつは死海の近くのエンデゲだ。

パレスチナに移ったエッセネ派の人々は、その国の統治者たちによる独裁政治と聖職者たちからの嫉妬と闘わなければならなかった。そのため、エジプトで慣れていた以上に沈黙と孤独を彼らは強いられることになった。

彼らは白い布でつくられた長い衣服を身にまとい、悪天候でもない限りサンダルすら履かずに生活していた。その異様ともいえる姿を、一般の人々は彼らを「白い服の兄弟たち」と呼んでいたという。

パレスチナに本拠地を置いたエッセネ派が、歴史の表舞台に登場するのは、紀元前1世紀頃のことである。サドカイ派やパリサイ派と同じ時期に、その名をユダヤ教史に登場させるのである。しかし、彼らのことを記述した文献は意外にも少ない。今日遺されているのはフィロンの『書物はすべてよきものなり』『ユダヤ人の弁明』、プリニウスの『博物誌』、ヒッポリトゥウスの『フィロソメナ』、フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』など、政治家や歴史家たちが残したものだけなのだ。

もっとも、これらの資料はかなり詳しくエッセネ派のことを教えてくれる。

まずは、若い時代にユダヤの地を訪れ、エッセネ派の宗団をつぶさに見たアレクサンドリア出身のフィロンが書き遺したのから見ていこう。

「彼らはシリア・パレスチナに住んでおり、その数約 4000 人。都市を避け、地方の村々に住んでいる」

もっとも、エッセネ派は孤立して生活していただけではない。

「エッセネ派は、エルサレムでは当たり前のこととして行われていた、動物の犠牲をせず、敬虔(けいけん)な精神こそ唯一の犠牲であると考えていた。それゆえ彼らは、エルサレムの神殿での礼拝を拒否されていた。彼らは農業に代表される平和的な仕事だけに従事し、奴隷制度にも強く反対していた。

また、安息日(あんそくび)を厳格に守り、シナゴークに集った。そこでは座るべき椅子が決まっており、規範に則して上下の順位にしたがって、並ばなければならなかった」

修道院生活であるから当然とはいえ、彼らはかなり厳格な規範を守っていたという。その厳格さは、生活そのものにまで浸透していたようである。

「彼らの親切、平等、金銭、現世の目的と快樂に対する無関心ぶりは周囲の人々によく知られていた。

彼らはいくつものコロニーに分かれて住んでいる。そこには共同の倉庫、誰もが着ることのできる共通の衣服、共同の会計事務所もあった。



宗団員は、そこにすべての財産を委ね、出費は全員のためにのみなされる。ほかのコロニーからの訪問者は、同じ食事と同じ信仰礼拝が与えられ、大いに歓迎された」

以上が、フィロンの観察したエッセネ派である。次項では、別の識者の目を見たエッセネ派の記述から、その正体を探っていこう。

### エッセネ派が遵守した戒律

パレスチナ生まれの監督官オセビオンも、エッセネ派の奇異な様子を観察している。

「宗団への入会は、誰でもまったく自由で、そこでは人種は問題とされない。彼らは結婚せず、宗団内にひとりの子供もみかけない」

フィロンとオセビオンの記述から、エッセネ派の特徴をある程度推測することができる。

彼らは各地に分散して生活し、共通の信仰と教会、戒律で結ばれた共同体を形成していた。そして快樂の嫌悪、独身の強調など、その生活様式は、かなり禁欲的であったようだ。

それを裏づけるように、ローマの政治家プリニウスもまた、エッセネ派についてフィロンやオセビオンと同様の内容を自著に記している。

「エッセネ派は、死海の西海岸に住む独立した民族である」

「棕櫚の林の中に住んで、金銭を忌み嫌い、女を避けて生活している」

「世界でも、もっとも奇妙な人種である」

「毎日のように、打ちひしがれ、疲れ果てた人々が、遙か彼方からやってくる。それゆえ、そこで子供をもうけなくても、その人数は減ることがなかった」

フィロン、オセビオン、そしてプリニウスの記述から見ると、エッセネ派の共同生活は荒涼たる地に孤立して禁欲的な生活をする、クムラン宗団のそれにそっくりではないか。

さらにプリニウスの記述では、エッセネ派の居住地が「死海の西海岸、エンデゲの北」にあると具体的に書き残されている。

この「エンデゲの北」とは、クムラン洞窟からわずか 30 キロの地域一帯を指す。キルベルト・クムランもその範囲内に入っており、この場所がエッセネ派の修道院であった可能性も高まってくるのだ。

エッセネ派は、死海を望むこの荒れた地を信仰にふさわしい地であるとして、拠点に定めたのかもしれない。なぜこのような場所を選んだのか？ それは憎むべき侵入者であるローマの支配者と食卓を囲むほどに墮落したエルサレムの祭司や貴族たちとの接触を、彼らは避けようとしていたのではないだろうか。

もっとも、彼らとて、世俗との関係を完全に切り捨てていたわけではなかったようだ。

紀元前 1 世紀に、エルサレムの城壁の 8 つの門のうちのひとつが「エッセネの門」と呼ばれていたことは広く知られている。

それはつまり、それだけエッセネ派の規模が大きく、また影響力もあったということである。すなわち、宗団は広く世間に入り込み、同時に認められてもいたのだ。たとえば彼らは、さまざまな地域社会で、病人や貧しい人々の世話をするため、

とりわけ飢餓や伝染病が流行したときには、率先してホスピスを開設した。これらは「ベスサイダ」と呼ばれ、現在のホスピスや病院の原型になったものである。なお、ベスサイダの特別任務を遂行した働き手たちは「ホスピタル騎士団」と呼ばれていた。

さらにエッセネ派は、ベスサイダと同様に、さまざまな地域社会に救護ホームである"門"を開設していった。そこでは、食物や生活の援助を必要とする人々が、一時的に手厚い保護を受けることができた。エッセネの門が設けられたのは、こうした実績からだろう。

最後に、ヨセフスがエッセネ派について語っている記述を紹介しよう。

**「エッセネとは、聖人のことである」**

これは、ギリシア語で「聖者たること」「自然法で認められた」という意味で、聖なる生活をしているだけでなく、その生活が自然に則ったものであるという意味である。そのような彼らがどのように暮らしていたかというのは、次の記述でわかる。

**「ひとつの都市だけでなく、多くの町や村に住み、結婚はしなかったが養子を迎え、その教養と実践を教えた」**

また彼は、ほかの記述では少ない、女性に対するかなり特殊な考え方についても言及している。それによると、女性はその信仰心を3年に渡って試験された上で結婚が許され、子供が生まれると同時に夫から切り離された生活を規則づけられていたようだ。

性交は快樂のためでなく、子供を授かるための行為としてのみ認められていたからだ。それゆえ、水浴も男性は腰巻きをつけ、女性は下着を身に着けて行わなければならないようだった。

これらの記述から、エッセネ派の人々は、こうした共同生活下においては、女性こそが不和を招く元凶となると考えていたようである。ちなみにフィロンもわずかではあるが、エッセネ派独特の女性観を次のように記述している。

**「エッセネ派の人々は誰ひとりとして妻を娶(めと)らない」**

**「女はエゴイストで嫉妬深い」**

**「夫に罫を仕掛け、妖術で夫を誘惑する」**

**「女はあらゆる手段を使って男の目を悩殺し、耳を虜(とりこ)にし、知性をまどわせる」**

**「子供が生まれでもすれば、女は傲慢(ごうまん)になる」**

ある種の教訓めいた側面もあるようだが、いずれにしても現代の女性が聞いたら、女性蔑視(べっし)もはなはだしいと憤(いきどお)りかねない偏った考えをしていたようである。

しかし、こうした考え方に代表されるエッセネ派独自の考え方こそが、その共同体を維持していくために必要とされた、尊守すべきモラルだったのであろう。

**開示されない最終秘書「奥義の黙示」**

前述した通り、エッセネ派の宗団員の間では、私有財産という概念は認められていなかった。いかなる財産もすべての組織に属する人々との共有とされ、収支

を共同体の会計事務所が管理し、日常生活に必要な品々もそこから支給されていた。

現代人的思考ではかなり窮屈な暮らしをしていたエッセネ派の人々が、はたしてどのように一日を過ごしていたのだろうか？ それについてはヨセフスの自著がこれに詳しく、ここでは彼の記述をもとにエッセネ派宗団員の一日を見てみよう。エッセネ派の一日は、礼拝からはじまるという。

「夜明けに太陽を礼拝する」

夜が明けたことを告げる朝日に祈りを捧げる。これはおそらく、ゾロアスター教のミトラ神信仰につながるものであろう。

礼拝で一日がはじまると、規律正しい生活が待っている。

「夜明けの祈りが済むと、それぞれ割り当てられた仕事につく。

午前中の仕事は午前 11 時まで続く。

終わったところで白い法衣に着替え、冷水で身体を浄める。

食堂に入り、祭司の言葉にしたがって平等の食事をとる。

食事が済んだところで感謝の聖歌を歌う。

法衣を脱いで午後の仕事につく。

夕方、同じ要領で晚餐をとる。

どの場合の食事も、簡素なもので、ただ一日の祈りと労働に必要な量だけが用意されている」

そして、夜が更(ふ)けると再び礼拝が行われ、一日が終わるのだという。

ちなみにヨセフスは、エッセネ派への入団の様子についても詳しく語っている。そこからはエッセネ派の本質が浮かびあがってくる。

「宗団に入会するには、1 年の試験期間が必要である」

「宗団の規律をまず学習する必要がある」

「試験を通過すると、その禁欲ぶりが試され、合格すると、宗団員と一緒に沐浴が許される」

「それから 2 年後に入団が許可される」

「その際、誓約をしなければならない」

「質素な衣服にあまんじ、真実を愛し、不正の利得を追求しないこと、宗団の誰にも隠しごとをしないこと、宗派の文書をほかの者に洩(も)らさないことなどを誓うのである」

こうして入会を許された者は、信条の基礎となる教養と原理を今度は子供たちに教えていく。子供は 12 歳になるまで宗団の規定にしたがって生活し、以後 21 歳までは見習いという身分を与えられ、さらに研鑽(けんさん)を積む。21 歳になったところで入会の資格が認められ、30 歳までに立派な宗団員となることを期待されるのである。

これまでのさまざまな記述からはもちろん、特にこうした経緯から判断するに、いかにエッセネ派がユダヤ人たらんとしていたかが理解できる。そして自己を追いつめることで、自らを「神に選ばれた人間＝エリート」として意識していたことも想定できる。

なぜ、そうまでして彼らはエリートとして自己を磨こうとしたのだろうか。

そのあたりのことも、ヨセフスの鋭い観察眼はしっかりと感じとっていた。  
彼によると、彼らは、"信仰の人"であるという規範にしたがっていたという側面のほかに、預言者集団としての能力を維持しようとしていたからである、という。それはつまり、エッセネ派が預言のスペシャリスト集団であった、ということだ。たとえば、預言者マーヘナムという人物については次のように語っている。

「マーヘナムは紀元前2世紀に現れた預言者で、神の教えを説き、預言を告げることを日課としていた」

「彼の預言はことごとく的中した」

「イスラエルを治めていた異教徒の王ヘロデは、マーヘナムの預言能力に感嘆し、彼の拘束を解いた」

「もちろん預言のエリート集団であるエッセネ派の存在も認めた」

もちろん、ヨセフスはエッセネ派の人々の予知能力についても触れている。

「エッセネ派の間には、神聖な書物を読み、ある種の浄めを行って、未来を預言する者もいた。

その預言は、諸論文に精通しているので、外れることなど滅多になかった」

ローマ人であるヨセフスがこれだけ"感嘆の声"をあげているのは大変なことだ。なぜなら、ローマ人にしてみれば、エッセネ派の人々は、一段低く見てよい被征服者の一群でしかなかったからだ。そんな身分の者たちの、しかも特殊で不可思議な能力を最大限に評価しているのだから。

ある意味でエッセネ派讃辞(さんじ)ともとれるヨセフスによるこの記述からは、エッセネ派について興味深い情報をいくつも得ることができる。

まず、エッセネ派には、ユダヤの同胞のために、たびたび警告を発する預言者が数多く存在していたということ。そして、エッセネ派の一部は、禁欲的ともいえる修道院生活を通して修行を積むことで預言能力を鍛錬し、エリート集団として組織を維持していたということ。

さらに注目したいのが、ヨセフスのいう「神聖な書物」あるいは「諸論文」である。これまでの情報を重ね合わせて推測するに、これらが指すのは『死海文書』のことなのではないだろうか？ 中でも「神聖な書物」とは、預言の奥義を記したものでないだろうか？

実は、『死海文書』には「七つの文書」のほかに、「奥義の書」と呼ばれる文書もある。

その正体はいまだ定かではないが、漏れ伝わるところによると、「秘密」もしくは「奥義」を意味する言葉が頻出する特別な文書であるといわれている。それゆえに、この文書には「奥義の黙示」なる別称までもがあるほどなのだ。

『死海文書』を残した謎の人々がエッセネ派の人々であるとしたら、この「奥義の書」には、彼ら秘伝の預言技法が展開されていたのかもしれない。そして、ヨセフスが絶賛していたように、彼らが極めて高い予言能力を身につけていたとしたら、そこには今日までの"未来"や、我々も見当のつかない未来のことまで、記述されていたかもしれない。

はたして、謎の文書「奥義の黙示」には、いったいどんな謎が隠されているのだろうか。新たな情報の開示が待ち遠しい。

## 聖書信仰を揺るがす「義の教師」

では、エッセネ派の中核である、預言のエリート集団であるクムランの修道士たちは、なにを信じていたのだろうか。分析すると、5つの信仰対象があったようだ。

まず第一に、モーセの法に対するもの。彼らは自分たちを「選ばれた人」「最初の契約の人」「モーセの法の人」「エホバが〈選民〉と呼ぶ者」「モーセの法に帰依(きえ)し、あらゆる手段を講じてそれを満たす者」であると信じていたという。

モーセの法は、あまりに神聖である。シナイ山の契約(=十戒)は、単なる歴史の転換点ではない。モーセは神と人々をつなぐ媒介者である。モーセを通して神と結んだ契約は、不滅のものであり、神聖なものであり、厳重にしたがわなければならないものである。

イスラエルの祭司や貴族たちは、恥ずかしげもなく、それを裏切った。

修道士たちは、彼らの背徳行為を責めはするが、彼ら自身の忠誠心で、それを回復しなければならないと思っていた。したがって、選ばれた者として、彼らはモーセの法を正確に究め、字義通りにしたがおうとしていたのである。

第二に、彼らが信じたものは、「油を注がれたもの(メシア)」としてのダビデである。

イスラエルを統一したダビデの勝利は、イスラエルの最終的栄光の予告である。

第三に、彼らが信じたものは、来るべき預言者エリヤである。

第四に、彼らが信じたものは、預言者の魂である。

そして第五に、彼らが信じたものは「義の教師」である。

この「義の教師」は、彼らがもっとも威厳のある者として崇(あが)めていた存在だが、その登場は『死海文書』の「ハバクク書註解」に見ることができる。

**神はハバククに、末の世に起こることを書くようにといわれた**

**しかし、終末の成就については知らされなかった**

**神は預言者たちの言葉の秘義を、すべて義の教師に知らしめたのである**

この記述から推して「義の教師」とは、神の啓示によって霊妙な秘義に通じた"道士"であるといえそう。それはつまり、神に選ばれた預言のエリートたちをクムランに導いたのが、この「義の教師」であるという可能性が極めて高いということである。

「義の教師」が神から秘義を授かった新たな預言者であるのならば、エリートたちの預言の能力を鍛え、高めてくれる存在でもあったはずだ。当然、崇敬(すうけい)の対象にもなろう。恐らく、第一から第五まで挙げたクムランのエリート集団が信じたものたちのうち、第五の「義の教師」こそが、彼らにとっての真の指導者であったのは間違いないだろう。

なお、「義の教師」の使命は、以下のように記述されている。

**御心(みこころ)にかなった道に彼らを導き、神が終わりの夜に、背神(はいしん)の徒の集いになしたまうことを、末の末の世まで知らしめん**

このことから、近づきつつある世の終わりに備え、罪の悔い改めを説く者でもあったことがわかる。クムランにおける修道のエリートたちの浄めと祈りの暮らしは、まさに世の終わりを想定してのものだったのである。

だが、『死海文書』によれば、あるときメシアと信じられていた「義の教師」の前

に「悪しき祭司」と呼ばれる強力な敵が現れて、「義の教師」はクムランから追放され、迫害を受け、拷問(ごうもん)を受け、殉教したという。

このいきさつから、なにかを連想できないだろうか？ そう、イエス・キリストを襲った悲劇だ。もしそうだとしたら、「義の教師」はイエス・キリストということになる。

そうは言い切れないとしても、その原型、あるいはモデルである、という可能性はある。だとすると、聖書信仰の根底を揺るがしかねない事実である。『死海文書』がスキャンダラスな存在とされる理由はここにある。

はたして、「義の教師」とは、いったい何者なのだろうか？

**「義の教師」の正体はヨハネだった？**

「義の教師」とは、いったい何者か？

この疑問に対する回答は、開示されている『死海文書』の中にはどこにも見つけることができない。ここではあえて、独自の推論を展開してみよう。

「義の教師」の正体を導き出すには、まず「義の教師」に敵対した人物、あるいは民族を歴史の中からあぶりだすことが必要だ。それに成功すれば、おのずと敵対者に抵抗した人物、すなわち「義の教師」を特定することもできるはずだからだ。

「義の教師」に敵対した者、あるいは民族とは、邪悪な祭司と、『死海文書』の「光の子と闇の子の戦いの書」に出てくる敵、キッティーム人である。

まず、邪悪な祭司とは誰か？

紀元前 1、2 世紀に存在した歴史上の人物の中で、ユダヤと敵対した人物といえ、エルサレムの大祭司アリストブロス 2 世である。

圧政を執り行った大祭司として悪名高い彼は、ユダヤの国を 3 年半(紀元前 67 - 63 年)に渡って統治している。彼は紀元前 63 年に逮捕されて、ポンペイウスによってローマで投獄される。一度は脱出してパレスチナへと帰還することに成功するのだが、再び捕えられると、足枷(あしかせ)をはめられて送還された。そして紀元前 49 年、ポンペイウスの支持者の手で、獄中で毒殺されている。

このアリストブロス 2 世を邪悪な祭司と想定すると、不思議と符合してくる資料がある。

「ハバクク書註解」に次のような一節があるのだ。

「この意味はアブサロムの家、またその一党の人々に関わる。

彼らは義の教師の懲(こ)らしめに際して沈黙を守り、偽りの人に抵抗して彼を助けなかった。

この偽りの人はすべての会衆のただ中で法律を無視した」

ヨセフスの記述によると、アリストブロス 2 世にはアブサロムという名の伯父があり、その娘と彼は結婚しているのだ。

「邪悪な祭司」をアリストブロス 2 世と想定すると、「義の教師」はエッセネ派におけるユダということになる。

だが、ユダがそれほど重要な人物であったなら、ヨセフスが「神殿で人に教え、未来を予知する指導者である」とふれてはいるものの、その扱いはあまりにもそっけない。そこから推測するに、ユダは歴史上それほど重要な役割を果たしてはいなかったようである。

つまり、ユダを「義の教師」と想定するには、それと符合する材料が少ないのだ。では、視点を変えて、もうひとつの手がかり、敵キッティームについてはどうだろう。

キッティームとは、本来、キプロス島の都市キティオンの住民を指す。

しかし、後世のユダヤ人たちは、かなり漠然と"地中海の隣人"を頭に置いており、広く東方の島々、マケドニア、さらにはイタリアの民を指してこの名を使っていたようだ。

キッティームの民の気質について、「ハバクク書註解」では次のように描写している。

**敏速にして、戦いにおいては勇猛  
諸国民にとって、恐怖の源  
大いなる者たちをあざけり  
王者や主君をあざけり  
諸国民の砦をあなどって  
それらを包囲し  
破滅させる**

そして、彼らの指導者たちは、"指揮をとる"こと以外にも様々な蛮行を行ったようだ。

以下にそれを記そう。

**次々に姿を消し  
略奪を行ったあとも重税を課し  
多くの人々、若者、成人、老人、婦人、また幼児を剣によって滅ぼし、胎の実(注: 胎児を指す)にさえもあわれみをかけない**

こうした描写のすべては、むしろローマ軍にあてはまるように思える。

指導者が次々に姿を消すのは、執政官や将軍が常に交代していた内戦時の状況を述べているともとれる。

加えて「さながら鷲のように諸国民をむさぼり食う」という描写もあるところから、軍旗に鷲が描かれていたローマ軍を指すと考えられる。ローマ軍が軍旗崇拝を行っていたことは、古代の文筆家の多くが証言しているところでもある。

キッティーム人をローマ人と想定すると、紀元前1世紀という年代が浮かびあがってくる。そうすると、「義の教師」と想定されるのは、有徳の士オニアスという可能性も出てくる。

しかし、この人物も「義の教師」とするには、符合する点が少ない人物である。

それでは、「義の教師」は誰なのか？ やはり、イエス・キリスト自身なのだろうか？

だが、「義の教師」とイエス・キリストとの間にはおよそ1世紀の開きがある。「義の教師」＝イエス・キリストと想定するには、時代的に無理が生じる。

改めて、「義の教師」となりえる人物の条件を見てみよう。

——彼は、紀元前2世紀か1世紀頃に実在した祭司、それも神殿の高僧だった。

——彼は、新しいメシアの契約に導き、宗団をつくり、そこで律法を教えた。

——彼は、自身の教えと預言も含め、弟子を誘導した。

——彼は、宗団の殉教的預言を言い放ち、やがて訪れるメシアの時代のために祈ることを教えた。

こうした人物像をふまえ、近年オーストラリアの学者バーバラ・スィーリングが『イエスのミステリー』で新たな説を提示している。

「クムランの地は紀元前2世紀以降エッセネ派の亡命地になったが、紀元前31年地震に襲われ、見捨てられ、紀元26年、エルサレムからやってきた「義の教師」によって再興された」

スィーリングのこの説を正解とすると、「義の教師」としてある人物が浮かびあがってくる。

『新約聖書』に登場するヨハネである。

ヨハネは、預言者イザヤの"言葉の秘義"を解き明かし、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と人々に伝えた人物である。

そして、ラクダの毛衣(もうい)を着て腰に革の帯をしめ、イナゴと野蜜を食べ物とし、敵対するファリサイ派やサドカイ派の人々を、「蝮(まむし)の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか」と激しく糾弾したことでも知られている。

『新約聖書』にこのように描写されているヨハネと、力強く神の声を伝えて人々を荒野に導いた「義の教師」の姿は、二重映しかのように符合して見えないだろうか？

しかし、「義の教師」をヨハネと仮定すると、その激しい気性は、プリニウスが書き残した「棕櫚(しゅろ)を伴侶とし、平和を愛する共同体」というエッセネ派という宗団のイメージとは相容れない。

もしかしたら、プリニウスが観察したエッセネ派は、徹底的に禁欲的で平和的であった時代のもので、「義の教師」が現れたときのエッセネ派はまったく別の組織に変容、神の言葉を伝えるためには戦いも辞さないという過激な宗団に新生していたのかもしれない。

バーバラ・スィーリングが「義の教師によって再興された」と強調しているのは、この点ではないだろうか。

この推定が正しいとしたら、「義の教師」=ヨハネ説が成り立つ。だとすれば、ヨハネから洗礼を受けたイエス・キリストも、新たに変容したエッセネ派と無関係であったはずはない。イエス・キリストは新生したエッセネ派(=クムラン宗団)と、その指導者である「義の教師」ヨハネなくして存在しえないことになるのだ。

### 初期キリスト教会=クムラン宗団

ここまで、イエス・キリストを彷彿させる「義の教師」とは何者であるのかを探るため、紀元前後の歴史家たちの記述をもとに、クムラン宗団とエッセネ派の比較を行ってきた。

結論として、「クムラン宗団=強硬路線に生まれ変わったエッセネ派」という図式が浮かんできた。

さらに推測を進めていくうえで、「強硬路線のエッセネ派=初期キリスト教会(原始キリスト教集団)」という図式が、両者の宗団の性格を比較することで成立する必要がある。

そしてそれが成立したとすれば、「クムラン宗団=初期キリスト教会」の図式が成り立つこととなり、イエス・キリストがクムラン宗団の一員であること、そして



彼が何者であるかも、明らかになってくるのではないだろうか。

こうした仮説を前提にして、エッセネ派と初期キリスト教会の性格の共通項を追ってみることにしよう。

まず、最初に挙げられるのが数字の「12」にまつわる共通項である。

エッセネ派は、宗団としての彼らを表現して「多数者」という言葉を使っている。初期キリスト教会では、多数を「12」という数字で表している。

同時に、「12」とはイスラエルの十二支族を表す数字でもある。

ユダヤ人の祖アブラハムの孫ヤコブには 12 人の息子があつた。これが、十二支族になる。この十二支族は、ユダヤの最盛期を築いたソロモン王の死後、ユダとベニヤン二支族からなる南ユダ王国とほかの十支族からなる北のイスラエル王国に分裂した。

ユダヤ民族の悲劇はここからはじまったといえる。

なぜなら、南ユダ王国は、その後数々の迫害を受け、イスラエル共和国として建国を宣言できたのは、1948 年になってからであるし、十支族の北イスラエル王国は歴史から姿を消してしまい、十支族そのものが幻の存在になってしまったからである。

しかし、ユダヤ民族は、いつの日にか失われた十支族がいつか現れ、二支族と合体して再び「12」となり、ソロモン王と同じ栄華のときを迎えるに違いないと信じている。

つまり両宗団にとって、「12」は"全体""多数"そして"完全"を意味するものとして、共通した数字なのだ。

第二の共通項は、両宗団の「すべては共有物」という規律である。

エッセネ派の場合、あらゆる財産は管財人が共同の倉庫に保管し、あらゆる支出がこの倉庫から支払われていた。

初期キリスト教会の場合はどうか。

イエス・キリストの『旧約聖書』「申命記」に刻まれた言葉に、そのヒントが隠されている。

**行きなさい。そしてあなたが所有するすべてを売りなさい。それからそれを貧しい者に与えなさい。**

イエス・キリストは、エッセネ派と想定される宗団(貧しい者)に加わり、富のすべてを共同の基金に投げ出すべきだといっているのではないだろうか。

共有財産の詐欺についても、両宗団は厳しい罰則規定を設けている。エッセネ派は、「共有の財産に対する詐欺を働き、財産を減らした者は、全額を返済しなくてはならない」と規定している。そして初期キリスト教会では、もっと厳しい規定が設けられている。

**所有物を売り、そのなにがしかを隠し持っていた**

この結果は、アナニナとその妻サッフリアの物語にそれを見ることができる。アナニナの不正を知ったペテロは、「それが自分のものだと思うなら、好きなようにするがいい。しかし、規則に応じふたりをして共有財産に差し出したとすれば、……」と論じている。

アナニナは神に嘘をついたことになるのだ。そして、たちまちアナニナは息絶

え、神を見捨てた恐怖に陥った妻のサッフリアも、数時間後に同じ運命をたどったという。

このドラマチックな物語から察するに、初期キリスト教会では、共有財産の詐取は、単なる破門ではすまされなかったようだ。

第三の共通項は、争いの調停法である。

両宗団とも、兄弟(同輩)のひとりが告発されたときには、まず被告と原告が一对で話し合いがもたれ、ついで、3人の証人が呼ばれ、さらに話し合いが続く。それでも解決を見ないときには、評議会が開かれる。そして、評議会の最終決定が下される直前、もう一度被告と原告の徹底討論が行われる。なお、破門の決定権は、この評議会だけが握っている。

第四の共通項は、洗礼という儀式の存在である。

初期キリスト教会が、エッセネ派のように毎日沐浴を行っていたかは定かではないが、いずれにしてもその実践に大きな差はない。

第五の共通項は、宗団内にメシアが存在していたことである。

初期キリスト教会でのメシアは、イエス・キリストで、唯ひとりでなければならない。一方のエッセネ派では、メシアは複数存在した。だが、もしかしたら初期キリスト教会に発展する間にひとりに集約されていった可能性もある。

第六の共通項は、両宗団とも、自らのことを新しい宗団であると意識していたことだ。

エッセネ派の人々は、自らを「選ばれた者」と意識し、神との新しい契約者であると規定していた。初期キリスト教会の構成員も、モーセの法への復帰、すなわちシナイ山の十戒への回帰を通して、新たな契約者となると自らを意識していた。

第七の共通項は、「聖餐(せいさん)」の存在である。

エッセネ派の「聖餐」は、以下のように描かれている。

「食卓が整えられ、ぶどう酒が混ぜられて飲む用意ができて、大祭司より前には、誰もパンもぶどう酒の一口目に手をつけてはならない。

それからイスラエルのメシアがパンに手を伸ばす。

それから宗団の全会衆が、各自その位階に応じて祝福を述べる。

また少なくとも 10 名が集まったときには、このような儀式にしたがって、彼らは食事を行うのである。」

まさにこれは、キリスト最後の晩餐を具現化しているのではないか。

共通項はまだある。この世は恐るべき大変革に向かっており、そのあと「油を注がれた者」の手で、神の王国が訪れる、とする思想である。

光の子と闇の子の戦いが起き、やがて最後の審判が下される、というもので、両宗団は、基本的に同じ世界観を持っていたのだ。

以上、8つの共通項を検討してきたが、これだけ共通するものがあるならば(しかもどれもが重要なファクターである)、「エッセネ派(その一部が強硬路線を主張)＝初期キリスト教会」という図式が成り立つと考えてもよさそうである。

すなわち、「クムラン宗団＝エッセネ派＝初期キリスト教会」の図式が成り立つわけである。

**史実に存在しない都市「ナザレ」**

ここまで見てきたように、エッセネ派と初期キリスト教会は同じ幹の根と考えてもよさそうである。『新約聖書』の「マタイ伝」では、以下のようにイエス・キリストのことを表現している。

**この者は危険な男で、全ユダヤの中にあつて暴動の首謀者である。そしてナザレ人の宗団の主導者である**

ところが、研究者の一致した見解では、ナザレという都市はいずれの史実にも存在していない。では、イエス・キリストの出身地であるガリラヤのナザレとは、どこにあったのか？ 残念なことに、『旧約聖書』にもナザレという言葉は出てこない。

ナザレは架空の町だったのだろうか？

それでは、ナザレはガリラヤと同義語であると仮定して考えてみてはどうだろう。

これは筆者の主観的な仮定ではない。ガリラヤのエッセネ派は、ときとして「ガリラヤ人」、あるいは「ナザレ人」とも呼ばれていたからである。そして、ナザレは、町の名ではなく、ガリラヤ人＝エッセネ派の人々の修道院、もしくはその施設である、と考えるとうどうだろうか？

ちなみに、学者の中には、「ナザレ」が見張りの塔を意味する言葉であると主張する人もいる。ここで、あのキルベルト・クムランにズングリとした塔があったことを思い出していただきたい。この塔が、宗団が暮らす地域をイメージつけた見張りの塔であったとすれば、この仮説でもやはりナザレはエッセネとつながってくる。

やはり、イエス・キリストは、クムラン宗団の修道院にいたのではないだろうか？

そして、宗団が唱えるメシア待望論を敏感に受けとめたキリストは、それを実践しようと試みた。その結果、磔刑(たっけい)に処せられたのではないだろうか？

これまでの、「クムラン宗団＝エッセネ派＝初期キリスト教会」の図式を踏まえると、その図式の中で、イエス・キリスト像を思い描いてもよいということになる。

つまり、『死海文書』で描かれたイエス・キリスト像は、いわゆるキリスト教徒が描いた『新約聖書』のイエス・キリストと同一であると結論づけられることになるのだが……。実際には、そう簡単に結論づけることができないようだ。

なぜなら、エッセネ派での"イエス・キリスト"の人物像と『新約聖書』の描くイエス・キリスト像との間に、微妙な差異があるからだ。

たとえば、エッセネ派では位階あるいは序列を厳しく遵守させたが、イエス・キリストはそれを無視している。

そして、『旧約聖書』にある「目には目。歯には歯。手には手。足には足。やけどにはやけど。傷には傷。打ち傷には打ち傷」ではなく「汝の敵も愛しなさい」といっている。

また、ローマの圧政に苦しむパレスチナ人に向かって「軽蔑すべき侵入者が、片方の頬をぶつなら、もう一方の頬を出しなさい」ともいっている。

こうした言葉から、革命家としての激しいイエス・キリストの像は浮かんでこない。だが、われわれは次のことを忘れてはならない。

エッセネ派と初期キリスト教会とは、その組織機構、規則、儀式、メシア待望論において、驚くほど一致している。

キリスト教が、ユダヤ主義から生まれたことも確かである。

そして「義の教師」は確かに存在した。

イエス・キリストが現れたとき、周囲の人々は、イエス・キリストを実在した「義の教師」に模してメシアとして迎えたのではないだろうか？

そして、イエス・キリストを聖書に描かれている「イエス・キリスト」として育んだのは、彼に洗礼を与えたヨハネだったのではないだろうか？

いずれにしても、イエス・キリストが何者であるかは、その謎はこれらの検証からでは解明できそうにない。その論考は次章で、彼の実態を見ていくことで解けるかもしれない。」

## 「義の教師」の片鱗 2

6. さて、「死海文書・義の教師」なる人物像については、上記3の①「死海文書の謎」(P・デイビス 著 浜洋 訳 大陸書房 1978 年刊)の次の一文も重要な傍証なのでここに紹介しておく。

### 「第四章 エッセネ派とイエス 義の教師とはだれか？」

すでにみてきたように、ユダヤの信仰集団——クムラン派ももちろんつながるし、クムラン派が創始者だったかもしれない——は、歴史上で知られる他の運動と同様に、その発展過程でさまざまな変容と多様性をもつ一つの運動として捉えなければならない。クムランの修道院を規準とすれば、エッセネ派の信仰と実践は他の面でかなり違ったものになる。自分たちの住居を都市以外の荒野に求めた死海派はより厳格な宗規を追求し、その教義と敬神を弱めることのないよう努力したもののようである。その教典はあらゆる行動の確信にみちた源泉でなければならなかったはずである。

クムランの修道僧たちは、それでは何を信じていたのか？

第一に彼らは、自分たちを選ばれた人、最初の契約の人、モーセの法の人、そしてエホバがこれらの人びとの中で、“選民”と呼ぶところの者、モーセの法へ帰依して、あらゆる手段でそれをみたす者……と信じていた。モーセの法は——『ダマスコ文書』に従えば——あまりに神聖で、それは宣誓の形で述べることはできない。シナイ山の契約は単なる歴史の転回点ではなく、モーセは宇宙の中保者である。そこでエホバはイスラエルの息子たちと不滅の契約を結び、その規約の数々は聖なるものとして崇敬され、厳重に従われなければならない。

この責務を、イスラエルの祭司や支配者たちは恥しくも裏切った。修道士は彼らのこの背神行為を激しく責めはするが、彼ら自身の忠誠でもって、それを回復しなければならない。したがって彼らは、モーセの法を正確に究(きわ)めようと不断に努め、字義どおりにそれに従おうとする。

第二に彼らは、〈油を注がれた者〉であるダビデの治世下で、エホバはその契約を強固なものにした、と信じた。ダビデの勝利は、イスラエルの最終的栄光の予告である。ダビデは神聖な王にして、彼の子孫は〈油を注がれた者〉として永遠に続く。ダビデの直系であるザドクはエルサレムの最初の、そして最高位の大祭司となった。修道院の祭司たちはこのサドクの“血を継ぐ”者であり、義を実践する真実のサドカイである。

彼らは邪悪のザトカイ(サドカイ派)と対立する。なぜなら邪なサドカイ派はエホバの祭壇を汚し、不正の利益に汲々とし、貧しき者の労働による果実を横領して争いを起こすからである。宗派の祭司たちのすべてがザトカイと同じく、レビ

人かどうか、なにを基準に選ばれたのか、はっきりしない。

またモーセの兄弟でエホバの最初の高貴な聖者であるアロンとのつながりも判然としていない。しかしアロンは確かに高潔の人で〈油を注がれた者〉(あるいは者たち。期待され続けてきたメシア以上の存在)と見なされていた。〈油を注がれた者〉はこれまでもいったように、イスラエルのすべての人びとから熱烈に待望されていたのである。

第三に彼らはきたるべき預言者エリヤ、またはエリヤを範とする者を信じていた。この思想はユダヤのあいだで広く信じられていたものである。あのアンティオコス・エピファネスが、豚を捧げるようにいつけた神殿の汚された祭壇を引きはがしたとき、ユダス・マッカバイオスは、そのような"不潔な石"を聖祭に使うなどという恐ろしい先例を知らなかったのであった。そしてマッカバイオスは「預言者が立ち上がり、彼らに何をなすべきかを告げるまで」待つように人びとにいった。

このような預言が待たれるべきだという待望の声は、いく度もいく度もユダヤの民のあいだで叫ばれた。預言者は〈油を注がれた者〉(メシア)のための道を見つけてくれるはずであった。

第四に、クムランの共同体は預言者の魂に深く染められていた。預言者アモスは「水の流れのように正義を逆巻かせよ」といったし、イザヤとエレミアは「彼の子供である人びとが義に帰るとき、エホバは救済の手を差し伸べるだろう」と約束した。"記述された"預言のすべては再興された。

それは洞窟から発見された断片の中でかたく信じられている。写本の二巻はもちろん『イザヤ書』である。宗団の各員は内には互いに正義と慈悲を、外には義を行なう強い倫理的動機をもっていたが、それはこれらの預言に起因するのである。彼らは"悪魔"を憎んだ。このことを私たちは認識すべきだが、それは「神の意志にそぐわないとき、エホバは神の怒りとして描かれる」という預言に支えられているのである。

また、モーセの書(『申命記』モーセの五書の第五番め)として修道院の各人が受け止めた預言の書の製作は、預言的動機が第一となっていることも認識されるべきであろう。預言的な言辞はそれゆえに、預言者たちが書いた文書と同じように律法でなければならない。

第五に、エッセネ派の実践は"新しい契約"(これは新約聖書と同義語であることに注意)、つまり明らかに、ダマスコにおける契約にもとづくものであることは疑問をはさまない。新しい契約のこの特別の法令に全宗派が含まれていないとすれば、『ダマスコ文書』を書いた宗派はさらにはっきりする。いずれにせよ、これは「義の教師」に導かれて、モーセの律法に立ち戻る契約であった。「義の教師」とは——神がその召命者たる預言者のすべての言葉を解釈できるように、神の知を彼の心に吹き込まれた者——人びとと会衆の上に起こるすべてを解義できる能力をそなえた者のことである。

「義の教師」は、クムラン派が非常な権威者として描くものだが、それは『ダマスコ文書』が公刊されたとき(一九一〇年)、初めて私たちに紹介された。文書の中で彼は"義の教師"あるいは、"唯一無比の師"と呼ばれている。また「終わりの日に義を教え導く」者についての記述もある。『ハバクク書』が公刊されたとき、「義の教師」に関する直接の言葉は少なくとも七カ所以上認められた。同時に「神がそ

の心に知を与えられたので、未来を予見する能力をもった」祭司についても、同様な記述がみられる。

それでは「義の教師」とはいったい、だれのことだろうか？　これが大事である。不幸にも、彼を証明する確かな資料はない。実証しようとする試みには相当の異論が生まれるだろう。聖書学者はこの解答は、他の二つの疑問点の中に見い出されるだろうという。

つまり、キッチーム人とはだれか？　さらに紀元前一、二世紀の歴史的事実の人格者は、教師とその迫害者、すなわち邪悪な祭司とリエの人とどういう関係にあるかが明確にされる必要がある。

キッチームの語(Kittim=は多分二音節の Khit-tēem と発音される。欽定聖書では Chittim となっている)はギリシア、またはラテン人を意味するものだろう。彼らは地中海諸島出身で、西方からの有力な軍事力に吸収され採用されたと考えられる。『ハバクク書』写本ではこのために、ギリシア人を意味するセリュースド人、またはのちの侵入者ローマ人を指す(Seleucid=セリュース朝の人びと。セリュース朝一世はアレキサンドロス大王配下の武将で王朝=三一二 BC~六四 AD=の創始者。小アジア、ペルシア、シリアを統治した)。前者を指す場合、写本は紀元前二世紀を意味し、後者の場合、紀元一世紀に関係することになる。

このことから、「義の教師」の年代決定は、キッチーム人が何者かを知る点が重要な鍵になる。おそらく紀元一世紀そこらのことだろうと想像されるのだが。少なくともローマ人の侵入という事実は、大きな意味をもつといえるだろう。

「義の教師」の正体を明かすもう一つの鍵は、邪悪な祭司とリエの人が何者か、という点である。紀元前一、二世紀のドラマチックな人物の中で、この主役を演じる人びと(あるいは個人。邪悪な祭司とリエの人というのは同一人物かもしれない)は無数にいるのである。ほんの短い時期に、途方もない悪漢が権力の座を占めたというのは信じられないことである。「義の教師」の役柄を決めるとき、舞台はあまりに狭すぎる。

アンティオコス・エピファネスによって王位を剥奪された大祭司のオニマス三世が指摘されるかもしれない。つまり彼の仇敵であったメネラウスはオニマスを迫害したことが知られており、邪悪な祭司といえなくもない。

世紀の転換期のアリストブラウス一世が邪悪の祭司といわれるなら、「義の教師」はエッセネのユダということが出来るかもしれない。ユダに関してはヨセフスが「彼は神殿で人に教え未来を予知する指導者である」と記述している。しかしながらユダが歴史上それほど重要な役を負っていたのなら、ヨセフスはなぜ、もっと詳しく彼について書かなかったのか？　それともユダなる人物はエッセネ派の年代史の中でのみ重要な役を演じていたのか？

「義の教師」は有徳のオニマスというのが最適かもしれない。ヨセフスによれば、彼は紀元前六五年に石打ちの刑で殺害された。このときのサドカイ派の指導者が、邪悪の祭司と呼ばれたのかもしれない。パリサイ派の指導者、つまりリエの人とサドカイ派はオニマスに敵対しており、彼らはお互いにその殉教者を非難していたのである。いずれにせよ、実証することは困難であると、認めざるをえない。

数多くの学者がさまざまなテクニックを使ってそれを実証しようとし、互いに自分の仮説を押し立てては他の説をぶち壊すのに懸命だが、一般の読者がこれに

ついて行くには非常な混乱を招くだけだろう。これらの言葉が書かれた時点では少なくとも、「義の教師」を実証する結論は何もない、というのが真実である。

それでは「義の教師」なるものは果たして実在したのだろうか？ はっきりいえるが、実在したことに疑問の余地はない。彼について特別の歴史家が書いたものが存在しないという事実は、イエスの場合と同様に、あまり問題にされないようだ。イエス自身が「義の教師」だったのか？ その可能性はなきにしもあらずだがしかし、これは無視したほうがよさそうだ。「義の教師」とイエスとは、少なくとも一世紀の開きがある。年代的に無理なのである。

——彼は紀元前二世紀か一世紀頃(多分後者だろうが)に実在した祭司、それも神殿の高僧だった。彼は子弟を新しいメシアの契約に導き、宗団を創り、そこで律法の義を教えた。そして彼自身の教えと預言も含めて、子弟を指導した。彼はまた宗団の殉教的預言をいい放ち、やがて訪れるメシアの時代のために祈ることを教えたのだった。

この点に関しては『ダマスコ文書』や『戒律』の書で指摘されている『HGW』の書——その断片でも——が発見されれば、さらに詳しいことがわかるだろう。この書は特別に貴重な価値のあるものとされている。この失われた巻物は私たちが困惑させている秘密のドアを開ける鍵のように思える。その点でことのほか重要である。」

### 「義の教師」の片鱗 3

7. つまり、「義の教師」とは上記5においては「洗礼者ヨハネではないのか!?!」、上記6においては「ユダかもしれないし、有徳のオニアスが最適かもしれない!?!」と、いまいち曖昧な指名である。もっとも大方の聖書学者達?は「オニアスを支持しているようであるが」。又、「ヤコブ」が「義の教師」であるとする説もある。

### 「義の教師」は聖書世界唯一の善人なのか!?

8. 私(新村)は、本文引用者を除く、所謂聖書学者達の軽薄な手合いを心底軽蔑する。そもそも聖書なる奇々怪々にして魑魅魍魎なる文書の正体は次の一語につきる。

- (1). 旧約聖書は「猿轡と殺戮の書」(異民族生け贄・燔祭)である。
- (2). 新約聖書は「金轡と殺掠の書」(異教徒生け贄・燔愛)である。

という聖書の正体を知らずして何をかいわんやなのだ。

旧約聖書は殺人者モーセの逃亡劇を奇々怪々なる『奇跡』で脚色した異民族殺戮の物語であり、新約聖書はそのモーセの奇々怪々なる『奇跡物語』を100%パクったペテン師パウロ、ルカ共謀による福音書なる殺掠の書であって、この事はルカによる「使徒行伝」5章「アナニアとサフィラ」という善良な夫婦が殺掠される一事をもって証明される。

- ①. アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売ったが、妻も承知で代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。(使徒行伝.5.1-2)
- ②. するとペトロは言った。「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。(略)あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」(使徒行伝.5.3-4)
- ③. この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。(使徒行伝.5.5)

それから3時間ほどして、夫の死を知らない妻のサフィラがペトロの前に現れる。ペトロは、妻を試すのである。サフィラも嘘をついたため、ペトロは「今度はあなたを担ぎ出すだろう。」と宣言する。すると彼女はたちまちペトロの足もとに倒れ、息絶えるのである。(使徒行伝.5.7-10)

使徒行伝のこの節話こそイエス・キリスト教の核である福音書と言われる物語の全貌であって、正に新約聖書が「金轡と殺掠の書」の証左なのである。

(3). 何故この節話が福音書の全貌に値するのか。

①. この夫婦は、土地を売ってキリスト教団に参加しようとしていたのであり、未だユダヤ教徒のはずである。全財産の処分と供出が教団への入団資格であるならば、売却代金をごまかした夫婦は入団を許さないだけで十分ではないのか。この行為が死に値するものとは到底思えず、そのためこれを知った信者達は恐れおののいたのである。

②. 次にこの夫婦に死を与えたのは、神なのかペトロなのか、ということである。神だとすると、救いや愛の神ではなく、怒りや妬みの神ということになる。これはイエス・キリスト教の根本教義とは相反する旧約の神(ヤハウエ)の面貌である。

③. イエス・キリストは自分を裏切っても、だまして死をもって罰したことはなかった。イエス・キリストの一番弟子に過ぎないペトロが、イエス・キリスト以上に過酷な死の罰を与える権威や権限をどこから得たのか。特に、ローマ法王はペトロをもって創始者だとしている以上、ペテロの「当該言行」こそが、イエス・キリスト教の信仰原点なのである。ペテロに斯様な権限や権威を付与したのは各福音書、使徒行伝を捏造したパウロ、ルカのペテン師二人である。

(4). イエス・キリスト教は、愛の宗教・救いの宗教であり「汝の敵を愛せ」という。

自分の土地を売った代金供出の問題で、善良な夫婦二人が殺掠されるような教えではない筈だ。イエス・キリスト教の全貌は「汝の敵を愛せ」だけではなく「右の頬を打たれば左の頬も差し出せ」(全て出せ!)の教えが核心であって、この教えの最たる喩えが、上記「アナニアとサフィラ」の節話で、私(新村)が言う「金轡と殺掠の書」の所以なのである。因みにイエス・キリストの正体は「洗礼者ヨハネ」である。

## 「義の教師」の条件と脚光の一文

9. 私(新村)の傍らにある上記3の7冊の本から上記1頁中段、2頁後段、16頁後段の、下記文意は、的を射た確かなる文献学的検証/符合であった。

ここで改めて「義の教師」となりえる人物の条件を整理してみる。

(1). 「ダニエル書には「秘密の事」(ラズ)とその「解き明かし」(ペシャー)が述べられているが、これらの語はクムラン文書にも見出され、神の使信はこの二つに分けられているので、この二つが結合されなければ、その真意がわからないのである。この二つを結合した者はクムランでは「義の教師」であり、原始キリスト教においてはイエス・キリストである。」

(2). 「……〔祭司、すなわち義の教師に手をかけ〕た邪悪な祭司は彼を死に追い込んだ……そして、神は、彼が流した〔血のゆえに罰することが〕ないまま邪悪な祭司を許したりはしないだろう。〔神は〕、彼を処刑〔復讐〕するために諸国の中で最も乱暴な者の手へと送り出し、〔む〕くいを受けさせるだろう」

(3).「——彼は、紀元前2世紀か1世紀頃に実在した祭司、それも神殿の高僧だった。



- 彼は、新しいメシアの契約に導き、宗団をつくり、そこで律法を教えた。
- 彼は、自身の教えと預言も含め、弟子を誘導した。
- 彼は、宗団の殉教的預言を言い放ち、やがて訪れるメシアの時代のために祈ることを教えた。」

となり、この線に沿って「義の教師」の実像に迫ると、次の一文が見事に脚光を浴びるのである。

新井佑造氏の論文「[ヨセフスにおける第四哲学党](#)」(9頁中段)

「第1に、紀元前47年頃、ガリラヤでおこったエゼキアスの運動があげられる。エゼキアスはガラリア人ユダの父であり（エゼキアスをガラリア人ユダの父とする考え、すなわち、ヘロデ死後ガリラヤのセポリスで反乱をおこしたエゼキアスの子ユダ（ユダヤ戦記 2, 56; ユダヤ古代誌 17, 271）とガリラヤ人ユダ（ユダヤ戦記 2, 118; 7, 253; ユダヤ古代誌 18, 4. 23; 20, 102; 行伝 5, 37）とを同一人物とする考えは Schürer 以来、多くの人々によって認められている。H. Graetz, op. cit., S. 250, 258. J. Wellhausen, Israelitische und jüdische Geschichte, Berlin, 1894, 1958<sup>9</sup>, S. 353. O. Holtzmann, Neutestamentliche Zeitgeschichte, Tübingen, 1895, 1906<sup>2</sup>, S. 55. Schürer I, S. 486 (New Schürer I, p. 381). G. Hölscher, Geschichte der Israelitisch-Jüdischen Religion, Gie Ben, 1922, S. 227. A. Schlatter, Geschichte Israels von Alexander dem Gro Ben bis Hadrian, Stuttgart, 1925<sup>3</sup>, 260f. R. Eisler, ΙΗ Σ Ο Γ Σ Β Α Σ Ι Α Ε Γ Ε Ο Γ Β Α Σ Ι Α Ε Γ Σ Α Σ, Heidelberg, II, 1929-30, S. 69, n. 3. R. H. Pfeiffer, op. cit., p. 35, 59. J. Jeremias, Jerusalem zur Zeit Jesu, II, 1924, S. 13, 147 (ET: Jerusalem in the Time of Jesus, 1969, p. 277). J. Klausner, op. cit., p. 200, —, Jesus of Nazareth, 1925, pp. 156, 162, 207. J. S. Kennard Jr., op. cit., pp. 281ff. W. O. E. Oesterley, A History of Israel, II, Oxford, 1932, 1951<sup>2</sup>, p. 366. F. M. Abel, Histoire de la Palestine, Paris, 1952, I, p. 423. H. Braunert, Der Römische Provinzialcensus und der Schätzungsbericht des Lukas-Evangeliums, Historia 6, 1957, S. 213. C. Roth, The Historical Backgrounds of the Dead Sea Scrolls, 1958, pp. 6f. —, Zealots in the War of 66-73, JSS 4, 1959, p. 338, n. 1. Hengel, S. 337f. Brandon, pp. 28f., 53. Bo Reicke, Neutestamentliche Zeitgeschichte, Berlin, 1968<sup>2</sup>, S. 83. A. Schalit, Hezekiah, Encyclopaedia Judaica, Jerusalem, 1972, vol. 8, p. 455. —, Judah the Galilean, Encyclopaedia Judaica, Jerusalem, 1972, vol. 10, p. 354. S. Applebaum, op. cit., p. 159. M. Grant, Herod the Great, New York, 1971, pp. 38, 221. M. Black, op. cit., p. 47. M. Stern, op. cit., pp. 138, 157.

これらに対して、エゼキアスの子ユダとガリラヤ人ユダとを異った人物とまたは否定的に考えるのは、G. Dalman, Worte Jesu, Leipzig, 1892, S. 112f. F. Jackson and K. Lake, op. cit., I, p. 424 (cf. F. Jackson, Josephus and the Jews, 1930, p. 265, n. 1). E. Meyer, Ursprünge und Anfänge des Christentums II, Berlin, 1921, S. 403, n. 1. H. St. J. Thackeray, Josephus II, (Loeb), p. 367, n. (e). M. Lagrange, Le Judaïsme avant Jésus-Christ, Paris, 1931<sup>3</sup>, p. 213, n. 1.)、ヨセフスによると彼は多くの部下をもつ ἀρχιληστής (盗賊の頭目) でシリアに近い辺境で勢力をふるっていたが、その頃がガリラヤに「知事」(στρατηγός)と

して赴任してきた若きヘロデは彼らを捕えて処刑してしまった（ユダヤ戦記 1, 204; ユダヤ古代誌 14, 159.）。ヨセフスはこの後、ヘロデの裁判なしのエゼキアス処刑は律法を逸脱した行為であったため、ヘロデがサンヘドリンに召喚されたことを伝えている（ユダヤ戦記 1, 210; ユダヤ古代誌 14, 167. このサンヘドリン召喚にヘロデは軍隊と共にのぞんだ（ユダヤ古代誌 14, 171.）。ヘロデはこのサンヘドリンでの裁判の件をうらみに思って（ユダヤ戦記 1, 214）、後にヒルカヌスⅡとサンヘドリンの親ハスモニア系議員を殺害した（ユダヤ古代誌 14, 175.）。このサンヘドリン召喚と、またこの記事が親ヘロデ的傾向をもつダマスクスのニコラウスの資料によっていること（H. St. J. Thackeray, *op. cit.*, Introduction, p. xxii. 新見訳「ユダヤ戦記Ⅰ」、総説、22頁.）、さらにその後のヨセフスにおける ληστής という言葉の偏向的使用（K. H. Rengstorf, "ληστής," Kittel, *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. 4 (E. T., 1967), p. 258: "In Josephus it (ληστής) is constantly used for the Zealots." Cf. A. Stumpf, "ζηλωτής," *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. 2, (E. T., 1964), pp. 884f.; C. Roth, *op. cit.*, pp. 332f., n. 2; Hengel, S. 41, 42-47 (とくに 43, 46, 47); S. Zeitlin, *Zealots and Sicarii*, JBL 81, 1962, p. 396; Brandon, pp. 36, 45, 55, 78, 105f, 108f, 112, 127; Marc Borg, *The Currency of the 'Zealots'*, JTS 22, 1971, pp. 505f; S. Applebaum, *op. cit.*, p. 163; H. Paul Kingdon, *op. cit.*, p. 80; S. B. Hoenig, *Qumran Fantasies*, JQR 63, 1972/73, p. 249. 前述したように、ヨセフスは「戦記」において、ゼーロータイやシカリが、ローマに対する反乱を企て、その結果、エルサレムとその神殿の破壊・崩壊をもたらし、ユダヤ民族を最大の危機に陥れた張本人であり、彼らはヨセフスにとって、ユダヤ人の不幸の元凶としての犯罪者でしかなかった。それゆえ、彼らを実際の盗賊・略奪者と区別せずに ληστής と呼んで蔑視した。その意味で「戦記」は彼らに対するヨセフスの一大告発書である。) などから、エゼキアスはヨセフスのいうような単なる ἀρχιληστής 盗賊の頭目ではなく、民衆の間にかかなりの指導力と影響力とをもった人物——おそらく、政治的抵抗を目的としたゲリラ活動の指導者——であったのであろう (cf. J. Klausner, *op. cit.*, p. 141; A. H. M. Jones, *The Herods of Judaea*, Oxford, 1938, 1967, p. 29; K. H. Rengstorf, *loc. cit.*, "Hezekiah was not a bandit but a political revolutionary, perhaps with Messianic aims"; Hengel, S. 319-22; Brandon, p. 28; S. Applebaum, *op. cit.*, p. 159; M. Grant, *op. cit.*, p. 38, "Ezekias (Hezekias) was a nationalistic, underground political agitator, and in some circles a national hero in the tradition of Judas Maccabaeus himself"; H. Paul Kingdon, *op. cit.*, p. 79; M. Black, *op. cit.*, p. 47. エゼキアスの運動はその子ガリラヤ人ユダの運動と共に、ガリラヤ人の人々が熱烈な親ハスモニアで、親ローマのイドゥメア人ヘロデによる統治に反対した背景をもっている (ch. M. Grant, *loc. cit.*)。彼はまた、メシア僭称者であったともいわれている（エゼキアスのメシア的解釈については、H. Gre Bmann, *Der Messias*, 1929, S. 458f.; R. Meyer, *Der Profet aus Galiläa*, 1940, S. 73ff.; S. Mowinkel, *He That Cometh* (E. T.), 1956, p. 284 らによって主張されている。ラビ伝承によればエゼキアス（ヒゼキア）はヒレルによってメシアと認められている（Babylonian Talmud, Sanhedrin, 98b, 99a）。なお G. F.

Moore, Judaism, II, p. 347, n. 2 はこのヒレルはイエスと同時代人であった有名なラビ、ヒレルではなく別人であるとしている。また、タルムード記者はこのヒゼキアがユダヤ王ヒゼキアであるとしている。しかし、S. Mowinckel, op. cit., p. 284, n. 6 は H. GreBmann の考えるガラリア人ヒゼキア説 (op. cit., S. 449ff.) を正しいとしている。さらに 3 世紀の伝承によると、Rabban Yohanan Ben Zakkai は死の直前に、ヒゼキアのメシア性を述べている (Jerusalem Talmud, Sota 24c, 29f.)。cf. H. Strack und P. Billerbeck, Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, München, I, S. 30; P. Volz, Die Eschatologie der jüdischen Gemeinde im neutestamentlichen Zeitalter, Tübingen, 1934<sub>2</sub>, S. 206f; Hengel, S. 297f., n. 3.)。』

### 「死海文書・義の教師」の全貌

10. もとより上記 9 後段の新井佑造氏の論文は、「義の教師」について論じたのではなく、所謂「熱心党」について、ヨセフスが説く「第四哲学党」の「ガリラヤ人ユダ」について論証したのであって、その「ガリラヤ人ユダ」の父親である、「エゼキアス」については上記 9 後段の小論の通りほんの傍証程度なのである。

然し乍ら、私(新村)にとっては、これほど重要且つ貴重な検証記録はない。

なぜなら上記 9 (1)(2)(3)でいう「義の教師」の条件に「エゼキアス」は全て当てはまるからである。

(1). 「ダニエル書には「秘密の事」(ラズ)とその「解き明かし」(ペシャー)が述べられているが、これらの語はクムラン文書にも見出され、神の使信はこの二つに分けられているので、この二つが結合されなければ、その真意がわからないのである。この二つを結合した者はクムランでは「義の教師」であり、原始キリスト教においてはイエス・キリストである。」とは、両者共に「メシア」であるということである。

この条件に「エゼキアス」は氏の論文終段(メシアの僭称)の通り 100% 符合する。

(2). 「……〔祭司、すなわち義の教師に手をかけ〕た邪悪な祭司は彼を死に追い込んだ……そして、神は、彼が流した〔血のゆえに罰することが〕ないまま邪悪な祭司を許したりはしないだろう。〔神は〕、彼を処刑〔復讐〕するために諸国の中で最も乱暴な者の手へと送り出し、〔む〕くいを受けさせるだろう」

この条件にも「エゼキアス」は、下記①②の通り 100% 符合する。

①. 「エゼキアス」を直接手を下し殺したのはヘロデ王朝を築いた若きヘロデである。しかし当時のヘロデは単なるガリラヤの知事でしかなく「エゼキアス」を反乱分子として処刑する権限はなかった。権限を持っていたのは、ハスモン王朝末期の、ヒルカノス二世であり、ヒルカノス二世は「属王」(エスナーク)であると同時に「大祭司」でもあった。上記「……〔祭司、すなわち義の教師に手をかけ〕た邪悪な祭司は彼を死に追い込んだ……」とは、ヒルカノス二世と「エゼキアス」の事である。

②. 「エゼキアス」を直接手に掛けて殺したヘロデは、越権行為をしたとして、サンヘドリンに召喚されるが、ヘロデはヒルカノス二世に追認され、何ら処罰される事はなかった。

しかし、「神は、彼が流した〔血のゆえに罰することが〕ないまま邪悪な祭司を許したりはしないだろう。〔神は〕、彼(ヒルカノス二世)を処刑〔復讐〕するために諸国の中で最も乱暴な者の手へと送り出し、〔む〕くいを受けさせるだろう」との通り、最も乱暴な者(ヘロデ)によって、ヒルカノス二世は殺されたのである。

- (3)。「——彼は、紀元前 2 世紀か 1 世紀頃に実在した祭司、それも神殿の高僧だった。  
 ——彼は、新しいメシアの契約に導き、宗団をつくり、そこで律法を教えた。  
 ——彼は、自身の教えと預言も含め、弟子を誘導した。  
 ——彼は、宗団の殉教的預言を言い放ち、やがて訪れるメシアの時代のために祈ることを教えた。」

この条件にも「エゼキアス」は、下記①②③④の通り 100%符合する。

- ①. 彼(エゼキアス)は、紀元前 47 年にヒルカノス二世の黙認によりヘロデに殺されたクムラン宗団の高僧であった。
- ②. 彼(エゼキアス)は、新しいメシアの契約に導き、宗団(クムラン)をつくり、そこで律法を教えた。
- ③. 彼(エゼキアス)は、自身の教えと預言も含め、弟子を誘導した。
- ④. 彼(エゼキアス)は、宗団(クムラン)の殉教的預言を言い放ち、やがて訪れるメシアの時代のために祈ることを教えたのである。「エゼキアス」の偉大さは、子・ユダの第四哲学党(熱心党)⇒孫・ヤコボスとシモンの継承⇒ひ孫・エレアザロスのシカリ党、と四代に通底し、ローマ帝国に最後の最後まで民族の大義を示し、エルサレムの神殿が陥落するまで、「義の教師」(メシア)としての鑑となったことである。尚、孫二人は「洗礼者ヨハネ」の最初の弟子で、後の「ヤコブ」と「ペテロ」である。

## 謝辞 「義の教師」確信の御礼

11. 前回の「聖書の正体 『燐・han』 IV」2 頁 29 で、「義の教師」は「エゼキアス」であると予告しておきましたが、私(新村)が、「義の教師」が「エゼキアス」であると確信に至った経緯は、まさしく本文に引用した、「義の教師」の実像に迫った奇特新先学者達の検証論文、①イギリスの福音主義・新約学者フレドリック・F・ブルースの小論文「ダニエル書とクムラン宗団」、②「死海文書と義の教師」(ベティ・ストックバウナ 著、石川道子 編)、③「死海文書」封印された真実』(K・V プフェッテンバッハ 著 並木伸一郎 訳編 竹書房 2012 年刊)、④「死海文書の謎」(P・デイビス 著 浜洋 訳 大陸書房 1978 年刊)、⑤新井佑造氏の、「ヨセフスにおける第四哲学党」の論文、等他の先学の論文に接したお陰であることを、ここに感謝の意を表して厚く御礼申し上げる次第です。 本稿以上。追って詳論。

尚、ある論壇の先覚から、「新村さんのこの度の、義の教師=エゼキアス同定論文は、全て、引用論文を『符合』して、まるでステンドグラスのように色ガラス板小片の個性を繋ぎ合わせ、一個の芸術的個体を美事に完成させたようなもので、結実としての、義の教師=エゼキアスの発見であり、引用した論文執筆者の功績は多大であることを忘れてはならない」とご指摘を受けました。

私としても、誠にその通りであり、改めて引用者各位に敬意を表する次第です。

付録 1. 「義の教師」を確信させた、新井佑造著「ヨセフスにおける第四哲学党」全文掲載。

付録 2. 「死海文書の謎」マイケル・ベイジェント／リチャード・リー 共著 高尾利数 訳  
第 12 章『使徒言行録』。第 16 章『パウロ=ローマのスパイあるいは密告者?』。

付録 3. 「イエス・キリスト」の正体。

付録 4. 「革命有志 机下」

**根絶**

**六大差別**

宗教・人種・文明・制度・職業・貧富

**日本義塾 主宰 新村紘宇二**